

二人の話を語る

# 伊藤喜三郎先生と私

黒田大圓

先生とは、昭和四十年の暮れからご縁をいただいて、すでに二十年を迎えました。

最初の出会いは、中外日報の第二回インド仏蹟の旅行で一緒させていただき、飛行機の中で親しくお話をさせていただいたのが、そもそものはじまりでありました。

伊藤先生はその時、インドのニューデリーにハンセン病のセンターを設計なされ、その竣工式に出席なさるところでありました。私たちは仏蹟の巡拝で、先生もそのメンバーとして各地を廻り、デリーの竣工式に御出席なさるために、同じ団体に参加なさっておられたわけです。

給油の為に香港で一時間ばかり時間がありません。

私共特別僧堂の面々は海外旅行がはじめてなものですから、何かめずらしい物がないかと空港内で立ち回ら品定めをしておりました。気がつくとうしろに立派な紳士の方がおられて、「みなさん、今はお買いにならない方がいいです。」とおっしゃるんです。「帰りに又香港に寄りますから、お買物はその時になさったらどうですか？」と助言してくださいましたのが伊藤先生でした。

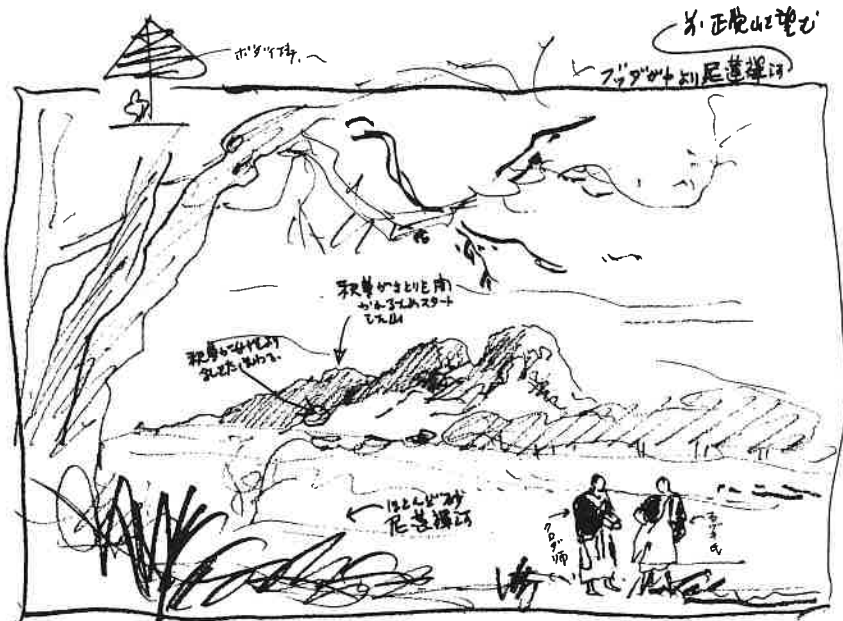
その後、飛行機の中で「先生、お仕事は何をしておいでのですか」とおたずねいたしましたら、名刺を出されて「私は建築の設計をしております、東北工

業大学の教授をしております」と話してくださいました。

いろいろなお話を伺っているうちに、先生が十二回もインドを訪れていらつしやることを知り、何度もインドを旅していらつしやる先生と一緒に心強いと思います。のちのち金魚のフンドと言われましたが、どこへ行くにもお供をさせていただきました。その時に伊藤先生がニューデリーにハンセン病のセンターを建築なさった事を知ったわけです。

空港よりカルカッタ市内のホテルに向かう頃はもう真夜中でしたが、目に入るものすべてがアラビアンナイトのような世界で、大変感動いたしました。

次の日の朝、我々は先生と一緒に市内のヒンズー教の寺院であるカーリーテンプルを見学しました。人間と牛が同居したカルカッタの町は、寺の中にも乞食・金持ち・病人・死を待つ人々が入り乱れ、あふれておりました。いけにえにしたひとつの首を、そのままカーリー神に捧げる光景を目のあたりにして、儀式とは



いえ、これが人間のなせるわざであろうかと、私は度胆を抜かれました。

そのあとインド各地をまわりましたが、苦行ののち前正覚山から下りていらして、尼蓮禪河のほとりですジャータから乳がゆの施しを受けたという場所で「このあたりでお釈迦さまはスジャータの乳がゆをいただいたんじゃないでしょうか」とご説明いたしますと、先生は大変感動なされ、すかさず紙を出してスケッチなされたんです。それが素晴らしいスケッチだったものですから、思わず「先生は一体何をなさる方ですか？」とお聞きいたしますと、「絵も描いています」とおっしゃるんです。先生が建築家であると同時に画家で日本南画院の理事でもあるという事を、その時知ったわけでございます。

ヒンドウ教徒のメッカ、ベナレスの聖なるガンジス河の沐浴場では、凝縮されたインドの宗教の形を見る事ができました。

誕生の祝福も、死者の供養も同じ水に委ね、そのか



たわらには瞑想にふける修行者の姿があり、全てはガ  
ンジスから発しているというヒンドウの原点を見たよ  
うな気がしました。

四大聖地の参拝の途中、デカン高原にさしかかりま  
すと、深い森の中には野性のサルが群れをなしてとび  
廻っておりました。夕方の、地平線に沈む太陽は、何  
か火の玉のように感じられ、直径、四、五十メートル  
はあるかのように思われました。インドでしか見る事  
のできない美しさに、先生も私も涙を流して大感激を  
した事は、忘れる事ができません。

その折に描かれた二百号の「釈尊説法の図」は、現  
在善光寺の不動殿にあります。

その後、インドの旅の途中で臨済宗大徳寺派高桐院  
の御前さまが高血圧で体調をくずされ、我々は一体ど  
うしようかと迷っておりましたら、伊藤先生が、ご自  
分だけが残って高桐院さんを看病なさり、日本に無事  
帰れるように一切の手続きをしてくださいました。何  
とご立派なお方だろうと、非常に感動いたしました。



先生に尊敬の念をいだけ大きなきっかけとなりました。

アジャンタ・エローラと仏教美術の宝庫を巡りましたが、アジャンタの石窟寺院では、法隆寺金堂の観音菩薩の源流とみられ、世界美術史上不朽の名作とされる、有名な蓮華手菩薩の前で、高価なコダックフィルムを惜し気もなく入れかえては、一心不乱に写真を撮り続ける先生のお姿は、美を求める菩薩に思えて、驚嘆のほかありませんでした。

シャー・ジャハーンが愛する妃タージの為に、三十年かけてつくったといわれる大理石の巨大な廟（墓）、タージ・マハールを見学したあと、興奮さめやらぬといった面持ちで、「私も家内の為なら、何十年かかっても彼女の望む事かなえてあげたい」と言いながら、遠い日本に思いを馳せておられる先生の姿に、心打たれました。現在、先生が最も好きなテーマとされている「捨身飼虎」の絵は、「この身を捨てても大切な人の為には何かをしてあげたい」という先生の偉大な口



マンチシズムが表出したものであると思います。

\*人間は、生かされて生きているという事を、その時先生から教わりました。私もその心境を持ち続けたいと思っております。

ハンセン病のセンターの竣工式で、先生は何か、人生でこれ以上の満足はないといった喜びのお顔をなさっておられました。その日の夕方、骨董屋にお供をして参りますと、先生は大変古美術に造詣が深く、古いタンカ（マンダラ）をお求めになりましたので、私も先生のお徳にあやかっただけの一枚を求めました。おそらく、ダライラマが、インドに亡命の折り、チベツトから持ってきたタンカだろうと思われるのですが、当時で八十ドルでした。欲しいと思いましたが、はその時私はあまりお金を持っておりませんのであきらめかけておりましたら、先生が立て替えてあげようとおっしゃって、トイレの中で腹巻きからお金を出して、私に貸してくださいました。

それが、古美術に目を開ききっかけとなるはじめて

の買物でした。お釈迦さまの供養の図です。それを伊藤先生のお力添えて手に入れる事が出来たわけです。

その夜、ホテルに帰って、先生と二人でインドの旅で求めたタンカ・ヘレニズムの美しさを秘めたガンダラの彫刻、純インド的なマトウラの仏像などを、部屋中に並べてささやかな古美術展を開き、スコッチで乾杯してインドとの別れを惜しみました。

インドの仏蹟を終えてバンコックに参りました。私は先生に将来の夢を話しました。「私の願いは宗祖を通して釈尊に還るという事で、まずタイ国で修行したい。その後仏舍利を勧請して日本に持ち帰り、津々浦々まで仏舍利塔を建てて供養したい。日本中にパゴダを建てよう！その設計は先生にお願いしたい！」と――それがその時の私の大誓願だったんです。

伊藤先生はその事を変えようこんでくださいました。タイで一通りの観光を終えた夜に私を招待してください、お坊さんとして修行を積み、頑張ってくださいと申されました。お酒をごちそうになりながら先生と別れを

惜しました。

タイで修行中、中外日報の本間社長さん（当時は部長さん）が修行中の私を訪ねてこられてプー殿下を紹介してほしいとおっしゃるんです。私は全日本仏教会の關係で妃殿下と親しくさせていただけではありませんから、お会いできるよう段取りをしてお案内申し上げたのですが、その折本間社長さんから、「パクナムを通して、あなたがおあずかりしておられる仏舍利を、真如苑に勧請させていただけないだろうか」という話を伺いました。

立正佼正会はインドの大菩提会から仏舍利をいただき、妙智会はビルマから勧請しているのですが真如苑にはまだございませんでした。そんないきさつから、仏舍利を持って帰る事になりましたが、間もなく真如苑で本殿を建てる事になり、その設計を先生がなさったのです。何という奇縁だろうと、本当にうれしく思いました。

タイ仏教の伝統的大組織、マハーニカイ派のワット・



パトナムで、二百二十七の戒を守る三衣一鉢の僧院生活を無事にすませて帰国いたしました。その後、アメリカの禅センターに開教師として出向きました。役をすませて帰国しましたので、挨拶に伺いますと、先生はしみじみと、「いくつになつた？」とたずねられるのです。「三十三です」と申し上げますと、「そろそろ、お嫁さんが必要だね」と、私の事を大変心配してくださいました。そこで先生は、銀座の資生堂のパラー等でいろいろな方を紹介してくださいましたが、なんと一時間に三回もお見合いしたというエピソードがあります。それ程、先生は私を案じてくださっておいででした。もちろん、結婚式には仲人をお願いいたしまして、今日まで至っているわけでございます。

釈迦殿の設計から、お不動様のお札の絵、「成寿」の表紙やカット、新年会の福引の色紙に至るまで、善光寺の為に絵を描いてくださり、檀家の方々も先生には非常に感謝しております。奥様には善光寺婦人会の会長という立場で、寺をお護りくださっておられます。

何もわからないところから今日まで二十年間、ひとつひとつ指導を賜りながら歩かせていただいたご恩は、言葉にはいい尽くせない思いがございます。

全く無名の私に、旅行で一緒だったというささやかなご縁だけで、心から慈父のようなあたたかさを惜し気もなく注いでくださいました先生のおかげで、どうにかここまで来る事ができました。いまだ何ひとつご恩返しをする事もできませんが、只々、精一杯の心で感謝するのみでございます。

もしも許されるのであれば、アジア十二カ国に散在する仏蹟を訪ね、釈尊の徳を慕いつつ聖地を直かに踏みしめて、先生に「釈迦一代記」を描いていただき後世に残す事ができれば、それ以上の報恩はないのではないかと思います。

世界平和と人類の幸せの為に

明日の光明の為に

そして、釈尊の教えを世界中に広める為に――